

近世新潟町の船大工と船作事

新潟町には、例えば天保十四年(一八四三)の場合、町民所有の廻船が五四艘、はしけ船が四三艘、天渡船が四二艘、他に大小の川船がおよそ四〇〇艘近くありました。こうした町内をはじめとした船の建造や修復を産業としていたのが船大工でした。小稿では彼ら船大工とその作事のあり方を史料からみていきたいと思ひます。

◆◆◆
天保十四年の「新潟市中風俗書」(「川村家文書」所収、当館蔵)によると、船大工は上の町・横町・大川前通りに居住し、河岸に「船蔵」という「細工場」を建てて海船・川船の作事を引き受けていたそうです。彼ら船大工の手間は家大工同様だったようですが、町外の仕事の場合、依頼主との交渉次第で手間は上下したようです。この頃、船大工仲間数は二五人とされていますが、ただこの人数だけでは町全体の船に対応できるとは考えにくく、加えて元治元年(一八六四)の職業調べに船大工軒数として一五一軒が数えられています。このため、この二五人は船大工のなかで棟梁的な存在であったのではないかと考えています。ちなみに川村修就在任期間と思われる町の長者調べ「新潟物持名前書」(「川村家文書」所収)には上位一四名以内「二万」のグループに下浜町居住の船大工・小島屋治郎右衛門の名が見られ、富裕者もいたことが確認できます。

なお新潟町の場合、船大工と家大工は別種として存在していましたが、その職分をおかし家作りを行ってしまう船大工もいたため、文化十三年(一八一六)には家大工がこれを訴えています。また文政五年(一八二二)、船大工たちは近

年「古法」が破られているとして「船大工規定書」(「新潟町会所文書」所収、当館蔵)を取り決めています。この規定書は船大工の相互扶助を目的としたもので、例えば葬式や普請、臨時の人足が必要な際の手伝いをする、仲間内で手透きの人がいるにも拘らず他方の職人を雇うことを禁ずることを定めています。

◆◆◆
さて、長谷川雪且の「北国一覽写」には町中の堀に面した小屋で小型の船作事が行われている様子がスケッチされています。ただ大型の廻船を積み入った町中で作事し、それを川まで運んで降ろすことは容易だったとは思えませんが、それでは大きな船はどこで作事をしていただろうか。

年不詳ですが、図は上島・下島近辺において廻船の作事が行われていたことを示すものです。各船の付近に「賄小屋」を建てて作業していたことや船を揚降するための諸道具が格納されていたこととみられる「轆轤屋」が近くにあったこと等が分かります。建造や修復が終わった船はすぐ目の前の信濃川へ降ろされたでしょう。また詳しい経緯は分かりませんが、新潟町では廻船の作事を行う大工・木挽・人足の食糧米を運搬する際に掛かる役銀等の免除制度があったようです。これに関する史料をまとめた

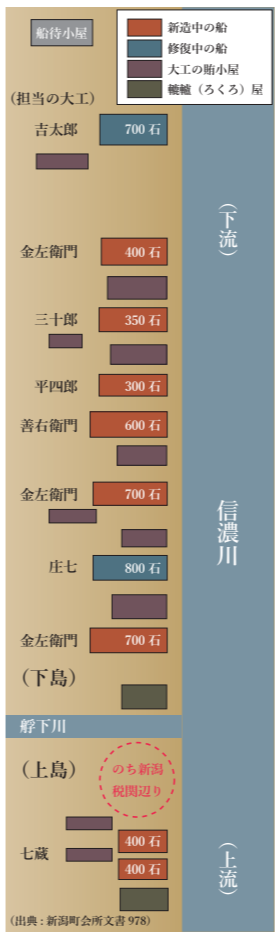


図 上島・下島付近

のが表です。史料はいずれも慶応三年(一八六七)のもので、ここから同町では町外・越後国外船主の船も作事していたことや右の免除申請を廻船問屋が行っていたこと等が分かります。

◆◆◆
ところで左図には人名が記されています。これらの人は各船の作事を行う船大工の棟梁的存在と考えますが、例えばこのうちの「吉太郎」は船大工・小島屋吉太郎と思われる。「小池上家文書」(当館蔵)には彼が建造を引き受けた廻船「神力丸」に関する史料がいくつかが残っています。神力丸は新潟町の廻船主・小島屋(小池上)春五郎が建造を依頼した船です。船の姿は慶応元年(一八六五)八月に胎内荒川神社に奉納された船絵馬(重要有形民俗文化財)によって知ることができ、一八反帆七人乗で船頭は重太郎という人だったようです。この神力丸の建造諸費用については同年の「神力丸船代勘定帳」(「小池上家文書」所収)に詳しく記されています。同史料によれば船体の代金は約四八四両で、「道具」類は新品(約九八両)だけでなく「古道具」(約一〇〇両)もあったことが分かります。また碇は「道具」類には含まれず、別に費用が立てられ、「下ノ関二而新碇買入代金」として約一八両が計上されています。神力丸はこうした諸費を合わせて総額約七九〇

表 慶應3年の廻船新造・修復

史料月日	日数	作事種類	作事場所	船の規模	船大工	大工・木挽等のべ人数	船主・船頭等	願人(廻船問屋)
1月	45日間	新規合船	下島	250石/5人乗	-	850人	新潟町・前田屋八十兵衛	前田屋松太郎
2月1日	-	新規合船	下島	300石	-	1000人	新潟町・越前屋太兵衛	越前屋太兵衛
2月5日	35日間	下廻り作事	-	500石/7人乗	藤蔵	750人	庄内加茂浦・善五郎、沖船頭・庄蔵	津軽屋次郎左衛門
2月5日	-	新規合船	上島	不明(19反帆)	喜三郎	2800人	越後太郎太夫浜・小島屋幸次郎	村田吉左衛門
4月8日	21日間	上廻り新造大作事	下島	1000石/12人乗	-	1300人	隠岐布施・能登屋熊右衛門、沖船頭・藤左衛門	前田屋松太郎

出典：上から新潟町会所文書1092・1085・1093・1094・442

両でした。このように船を手に入れるには船体代以外にも多額の費用がかかったようです。

◆◆◆
町に残された船大工に関する史料はあまりありません。このため今後は特に他所の船主が町の船大工に依頼した作事に関する史料を丹念に探していく必要があると見られます。

(安宅 俊介 学芸員)

【参考文献】「新潟市史」通史編1、1995

資料は語る

「潟のくらし展」は好評のうちに閉幕しました。開館以来の当館の調査研究や展示と潟環境研究所の成果を踏まえた、現状での到達点の一つの展示ができたと思ひます。

展示された絵図や漁具などをみて、改めて資料を集めること、研究調査すること、展示活用することの大切さを確認しました。低湿地で人々が作り、使い、伝えてきた資料が、人々の暮らしを語り、暮らし続けた地域の自然環境・社会環境を教えてくれるのです。

たとえば、エントランスのキッツォは、蒲原平野に独特の農具です。全国の低湿地で用いられるタブネは、箱型かソリ型ですが、キッツォはまさしく舟です。弥生時代の遺跡からは丸木舟形のタブネが出土するそうです。他地域ではより簡素な形態で製作しやすいタブネになったのに、蒲原ではなぜキッツォの名で舟型で残ったのでしょうか。蒲原では箱型やソリ型では不便だったのでしようか。あるいは多くの船大工が各地にいたことがその理由でしようか。展

示された蒲原各地で採取されたキッツォは、その開きや大きさなどが地域によって異なっています。

私が聞きかじっただけでも、ヤチキリガマや手回し脱穀機など、近代にいたっても、工業製品になっても、蒲原地域に独特な農具の作成・使用・展開があったそうです。紙に書き記されることない、人々が地域環境の中で培ってきた知見や技術に基づいて、農具は作られ、使われてきたのです。記録されていない人々と暮らしと環境について調べ、考え、知り、そして、これからの暮らしや社会、環境の維持に活かすためには、残された民具や古文書などの資料を収集、調査する必要があるのです。過去

の民具や古文書は失われることはあっても、増えることはないので、すから。



エントランスに並べられたキッツォ

収蔵資料紹介

猿図 五十嵐俊明 宝暦八(一七五八)年

やけに細長く、茶一色といった軸に近づいていくと、意外にもかわいらしい猿が三匹、だんごのように連なっているのが見えてきます。一般的な掛軸とほぼ同じ長さですが、幅は一四センチしかありません。ニホンザルとは異なり手が長く丸顔の猿の絵は、牧猿とも呼ばれます。室町時代に人気だった中国の画僧牧谿が描いたものがよく知られたからです。

猿たちは、みな何かを指さしています。手前の二匹は下を、奥の一匹は腕を伸ばして上を。どんな意味があるのでしょうか。

下へ手を伸ばす猿の姿は、しばしば絵に描かれました。それは、仏教の「猿猴捉月(取月)」という、ブツダが僧たちを戒めた際のたとえ話をテーマにしています。五〇〇匹の猿が、樹の枝をつかみ、それぞれの尾をつかんで連なり、なんとか水中に見える月を取ろうとして、枝が折れ溺れ死んでしまう話です。欲にかられて無謀な行動をとると失敗する、ということわざになっています。



絵の画面上部には作者による賛があります。「巴峽」という渓谷の、断崖に藤のつるが生い茂り、そこどこからか猿が集まってきて、月光の中で鳴きながら「碧天」に落ちると読み取れそうです。「巴峽」は猿が多いことで有名な中国の地で、平安中期の詩集『和漢朗詠集』に、秋の月夜、巴峽に猿のもの悲しい鳴き声が響くさまを詠んだ漢詩があります。「碧天」は青空のことですが、月が映る水面を青い空と表現したのでしょうか。いずれにせよ、やはり「猿猴捉月」の話が関係していると思ひます。

しかしここに描かれた猿たちはそれぞれ上と下を指さし、水中の月は上空の月が映ったものだと知っているぞ、とでもいうようです。少し得意げにさえ見えてきます。

この絵は、江戸中期、新潟の絵師五十嵐俊明によって描かれました。十一月半ばから開催する企画展にて、ホンモノをご覧いただけます。

(中村 里那 学芸員)